

## 経脈の三陰三陽説の成立過程

—老官山医簡から—

猪飼 祥夫

北里大学 東洋医学総合研究所医史学研究部

前漢の文帝時期の老官山漢墓から出土した経脈や鍼の治療法の文献は三種ある。『十二脉（附相脉之過）』『別脉』『刺数』である。『十二脉』と『別脉』には、足大（太）陽脉、足少陽脉、足陽明脉、手大（太）陽脉、手少陽脉、手陽明脉、辟（臂）大（太）陰脉、辟（臂）少陰脉、心主之脉、足大（太）陰脉、足少陰脉、（足）厥（厥）陰脉と、「有脉之過」を論じる部分と「別脉」である。

文帝期（BC 168）の『馬王堆』三号墓から出土した『陰陽十一脉灸経』、『足臂十一脉灸経』、呂後の二年（BC 186）の張家山『脉書』には十一脉の記述しかなく、心主の脉が欠けている。『十二脉』には「是動病」「所産病」などの記載がないが、治療の法則や病候の記載が増加している。経脈の数からみれば、馬王堆や張家山より心主の脉が増えて、『十二脉』は『靈枢』『経脉篇』により近づいている。同時に出土した漆経脈人形上の経脈線とも一致している。

『十二脉』には、足の三陽、足の三陰には三陰三陽説の概念が成立している。手の三陽の脉はあるが、手の厥陰の脉は心主の脉と呼称されている。馬王堆の『陰陽十一脉灸経』と『足臂十一脉灸経』と張家山の『脉書』を比べてみると、明らかに『十二脉』は進化した内容となっている。しかし、これらの文献が直線的に発展してきたのではなく、それぞれの文献を伝承したグループによって差があった。武帝年代（-BC 118）をくだらない綿陽の経脈人形でもまだ十二経脈は完成していない。

また『別脉』では、経脈の描写が短いもので「間別」として別の流注を表している。それは多くの短い経脈が存在したことを示している。その中で三陰三陽説にまとめられるときに切り捨てられたものも多かった。その一部が奇経となった。『刺数』は40種の病症の鍼治療の方法が書かれている。5種の刺法が書かれており、それぞれの経脈の俞に鍼をしている。それぞれの経脈には、三陰三陽に由来する脉の名前の俞がある。またその他の名前の脉の俞もあり、治療で俞が多様化する過程のなかで、三陰三陽では俞を表すことに限界がきていたと思われる。

武田時昌によれば、天の六気地の五行に注目して、『靈枢』の三陰三陽説の理論化に影響を認めている。五臓六腑の身体観によって『靈枢』の三陰三陽説が成立したと考えると、十一脉の方がより自然に近いと思われる。しかし『十二脉』では三陰三陽の思想によって基本構成され、その医学理論は前漢までに成立していたと認められる。